291
38

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 03964

291
38
1

中根文庫

はしがき

世間なきものは確かに所有者なし、世間なきものは、この世の新片寒木土を拾い集めさるべからず、有用なるものの来付丈吉郎田中吉府除、小吉助村の法及物質界精神界のものを保存し、世の文芸を貴ひ、小芸を種む、する者なり、予之を眼せず陰へと空敷を飾り貴重ある者れ、墨所日常の用に資する必須の書具なり、紙を取り、炭を拾つつも、世間完からず、而して大中のものは探りて保護する世界人なり、又予が力が性へさるなり苦しみを常に保存し之を保存し保護し之を紹介す

古座高校図書館
28.10.21
蔵書NO. 3964

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03964

懷本　第二目次

一 書簡 伊藤鶴年
一 日時 藍外翁
一 俳句 峰茂
一 漢詩 太宰春
一 原見清右衛門
一 大型 石平翁
一 古墳文化の概説　玉川生　於三世　西畑喜明
　　伊賀国　西畑素行　上田三高伊仙　弥保江村
　　法用幸山　伊賀雲渓　吉田正一
　　高麗墳墓　岩崎伊右衛門　玉井平吉　土門

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 03964

寺社一覧表を右取り　吉野市四
一今都所都を取り一つ宮ら後日市場
一祥源寺祖蓮志師

畫伯伊澤鶴年

東京豊郷新宮所の里家寺京都市の鐘本百年が
當に基源れを汲み煩つ法師たち
初新く大坂に住みたる後熊本市に移り又一人住む
故に新宮所にて世作品表彰一一卿宮に之を賜りの歩
一市に人形屋一帳新人形の宮殿と称し蔵を設け官幣
大社速玉神社に著色掛鯨図を蔵し帳一向許長二間餘
の本綿幕の掛に記臨に大作に掛鯨の實景を一覧一見す
べきものなり又古色所の天形掛物に紙に大掛物に帳船入
徒の図切り何れも善一
右の外の要領
出生地　東京豊郷新宮所　死亡地　熊本市

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03964

死亡年月 明治四十三年六月二日　享年八十一

墓地 新宮町南谷　　戒名 養壽院畫伯鶴年居士

郷里 阿波岳　中年九皐　後鶴年

名 之ヲ調査シタルニ新宮ニ親戚ノ者ナク唯其郷ヲ称シ

東ノ頭識ト澤德榮印トアリ德榮ニ遂ニ名ナシ

妻 新宮ニテ娶リタル尋ネタル明ナラス

遺族 伯ニ一男二女 長女ハ明ナラス

西川蘇四ニ嫁ス存命ナリ其子鶴雄ト云フカ家相訓

逝ヘタリ 長男ハ竹之四ト云ヒ大阪ニ住ム阪ニ死セリ寡婦

ト其娘ハ同地ニ在リ

以上ハ昭和二年七月新宮町ニ赴キ調査シタル事項ナリ此

外ノコトハ知リ難シ

伯ノ名ハ畫家人名辞書ニ見ヘタルモ其事業経歴新宮史料ノ

郷賢ノ史伝等ニハ之ヲ脱ス 若山ノ人費志保親若紅外郷土

誌術家小傳續篇中ニ方名ヲ列ネタルノミ及ヒ

伯ノ略年

伯ノ鶴年名ハ德榮 鶴年ト称シ初メ阿岳中年ニ九皐

後ニ鶴年ト称シ新宮町ノ人ナリ早クヨリ郷ヲ出テ大阪

ニ移リ後ニ熊本ニ住シテ殺生ヲ畫ヲ能クス晩年

力新使ニ通玉神社ニ掛額ノ図アリ明一向半ニ宿ス

大正元年ト　明治四十年六月二日歿ス享年八十一

曾テ藍舟ノ画ヲ見ル雋、赫、富士三皆岸派
如シ富士ハ家ニ茶ニ茶ヲ赫ハ墨野氏ノ藏ヨリ後ニ山
木ヲ得タリ南京ヨリ　新宮涼庭ノ画貧ナリ又古来
画匠ナカリシト見ヘ其点ヲ問カヘ藝舟ノ画新宮ニ
稀ナリ画工ニ於ケル為カ
新宮ニ墨跡ヲ保存シ度モノ也

海者猶
既遊任、
氣謂宜
田崎翁
砂筆汝
人温和
学於陽

川慶洞皆有造詣蕊迚武藝大嗜画游京都入岸駒門後主

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 03964

田崎藍崖翁

藍崖翁の碑那智山ノ左リ曰く

正三位貴族院議長學習院長
公爵近衛篤麿撰

名山藏跋

藍崖田崎翁碑

那智之瀑種当海内第一、直下七十丈、幅十餘丈、過海者猶逕望匹練於雲際、過瀑而上、山愈深、境愈靜、華山帝既遯位、結廬焉、以居、余嘗游此幽邃閒寂絶無人間煙火之氣、謂宜有高人隱士盤旋以考槃、何其寂々無聞也、既而得田崎翁藍崖焉、翁常愛那智之勝、賦和歌曰、道礼来き捷麻御峯汝那智山乃瀑ゑ星真乃楫廻下蔭、翁紀伊新宮人、為人温和若謙、意言笑、好文雅、學和歌於八木之禮、橘夏蔭、漢學於陽川麓、洞、皆有造詣、嘗遍武藝、太嗜恵、游京都、入岸駒門、後主師

南宗、後明人筆意、其郷距那智六里而近、因屢游覽、遂有終焉之志而未果也、家世郷士、業染工兼農、以資産著聞為大庄屋、固辞不就、晩専修佛法、参禅持戒、暇則以詩歌丹青自娯、昔者鴨長明吉田兼好、遯世隠居、超然高蹈、以翁視之、其厭棄勢利則同也、信佛善歌則同也、愛好山水則同也、翁宣二子之流歟、抑二子皆成其志而翁則否、非以遭遇有異邪、然二子坎軻不遇、才不用於世、或有籍以伸其抑鬱不平者、翁則生遭昇平、家道輩富、而能脱棄世累、蓋其恬淡寡欲根于天性者然也、年七十明治十六年三月十八日歿、葬新宮先塋之次、翁諱光榮、字伯仁、通称伊兵衛、号曰榮營、本姓小西、厨田崎氏、以其女為配、生三子二女、翁其長子、娶城戸氏、生二子一女、長孝禁襲称伊兵衛、承後、次道榮称豊三郎、別

孝の字誤字なり

孝は孝の俗字なり

成家、女適盛崎八右衛門、翁嘗撰明人畫録逸文珠普賢三像、謁畢生心力、描写入神、孝禁將建碑於那智山如意輪堂堂内、刻遺詠於碑陰、并細三像於如意輪堂、来請予文、於是乎翁接隠之志始成、而其永言心畫亦得託焉以傳不朽、孝禁其舉可謂孝矣哉、乃銘之曰

逃名於禅　寓道於技　心境入寞　身何遠徙
飛泉噴薄　老杉有苔　英畫不泯　名山藏蹤

明治二十九年丙申十一月

正四位　熊田恭

文學博士重野安繹撰并書

能かれ去て古何ぞ那智山に
隠れ住むや乃杉の下蔭　伯爵通禧書

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03964

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 03964

南宗、飯明人筆意、其郷距那智六里
当之志而未果也、家世郷士、業染工
左屋、因辞不就、晩專修佛法、参禪持
誤、昔者鴨長明吉田兼好、遯世隱居
厭棄勢利則同也、信佛善歌則同也
二子之流歟、抑二子皆成其志而翁
然二子坎軻不遇、才不用於世、或有
翁則生遭昇平、家道豐亨、而能脫棄
子天性者然也、年七十明治十六年
先塋之次、翁諱光榮、字伯仁、通称伊
西、嗣田崎氏、以其女為配、生三子二
生二子一女、長孝禁襲称伊兵衛、

孝の字誤字なるべし

孝子孝の誤字なるべし

成家、女適塩崎八右衛門、翁嘗摸明
像、竭畢生心力、描写入神、孝禁、將遵
塚内、刻遺詠於碑蔭、并納三像於
子翁接隱之志始成、而其永言心表
禁世舉可謂孝矣哉、乃銘之曰

逃名於禪　寓道於技　心曉入
飛泉噴薄　老杉有蔭　英靈
明治二十九年丙申十一月

正四位　藤田等貴撰

文學

能加れ者て古何、伊一記八那智
隱ゝり加く乃杉の下蔭

昭和の頃新宮にて翁の事を知る人少し又那智山観音堂に詣する人多きも此碑を読む人少かるべし碑も亦自ら没するなり新宮の事を記せる著書に翁のこと大し　昭和十九年四月一日　中根黙著

横井精一氏曰
明治十三年繪図出品目録那智瀑布と富士樹下
金剛と云る人島崎豊昭氏翁墨龍の額を持ち来り水墨山水額並富士の粗画を蔵し皆愛玩つきなり

浦春暉君

浦春暉君通称を義太郎と云ひ竹園と號す又方外箇園兩峯等の號あり一西年嘗郡江田浦の人なり旧家なり紀伊續風土記に曰く

琴家傳へいふ駿河守忠重五代孫浦野四郎重遠の裔小川又次郎義重の後なり義重熊野より當国に来り江田浦に住すといふ恐れとも未だ其の事を遇たず又書業絲矢にて詳ならず封初以来地士に命せらる大慧公の時より大庄屋を勤め代々相續す

地士　浦　保才次

大慧公紀外藩主六代徳川宗直卿にて享保頃の領主なり地士とは藩祖の頃領内の郷士を優遇せられたる称

所にて一時扶持を與へられたること有りて俸才
次君は君の祖父小富士
君の家代々江田組の大庄屋を勤め父の名を義右衛門君
と称す君弘化元年辰年三月二日を以て江田浦に生る幼
にして頴悟等倫なり五歳能く文を属し筒蹟を行る長
て博く経史に通し毒佛書を渉猟し詩文を能くし和歌を
咏し書画等に亦之を巧みなり
半蔵若年より国人敬服せさるなし
文久二年大左屋の職を襲き王政維新の後徴せられて和歌
山縣藩士属となり次て東京に赴き故三条実美公の知遇
を受け用ゐられて内務省に出仕し明治七年司法省判事
に轉じ同十年弘前裁判所長となる同十六年大蔵省に轉
じて記録局長に任せられ後五位となり勲六等に叙せら
れ旭日章を授けらる其有為の材にして勤功あることを以
て見るべし明治廿四年病に罹り官を辞して郷里に帰臥
す以来悠々自適詩歌を咏じ筆墨を弄し巡情を伸べ雅懐
を遣る同廿七年春吟秋亭を営み歌して曰く

竹園小築　聊学子厳　寒韻繞屋　名曰吟秋　寸志静
雲　無憚無畏　高所羅皇　白日悠々　玉殿禅味　憶
致清幽　窓間一望　煙波白鷗　天放自在　風月為儔
若子之裏　須臾可収

又

て来夏日本洲君見寄詩歩瑶韻以供一粲
此生丘壑是前緣　十笏書楼百畝田　志古居諸随喚倣

春末戒稚黄琴研　琴樽自撰秘康頓　煙水相談李郭
他　誤把雲名傳碧茂　美他二賢推詩格
竹田迂史初稿

明治二十九年十月六日病み遂に致す享年五十有三江田
海藩寺の先塋に葬る謹しむ文應院厳方外春暉大居士
と称す里人深く君の死を惜む君遺稿若干巻あり家に蔵
す昭和八年十二月四日中根七郎謹稿

城彦太郎君

西宇摂郡江住村の先学者城彦太郎君あり経世の才あり
て特に教育事業に熱心なりしことを傳へ称すべきなり
を耳にす昭和八年十一月書を江住村の山田瀧次郎君に
送りて城君の閲歴等を問ふ山田君為めに書を認めて其
概要を示せらるるを見るに筒々明に城君の面目
を現出す是日即其全文を左に収む
家世は郷士たり城彦太郎と称し桂谷と號す
出生村　紀南江住村
生年月日　弘化四年十月十九日
死去年月日　明治十七年七月七日
墓地　江住村潮音寺

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03964

学歴　年少の頃周参見郷学所に学ひ弱冠にして伊勢
津藩の鴻儒土井聱牙先生の門に入り専ら歴史を修む
読書未た甚深からすと雖とも夙に博く大義に通せし
と云
性行　長身魁梧風貌秀穎にして朝暮里中を逍遥往途
に壮者に遇へは之を奮励し老者に会へは之を慰撫せ
人仰て敬慕せすこと師父の如し
家に価を貯へ客来れは終夜飲且語り辞其言もんと欲
せる所敢て尽さゝるなし人其識見と襟懐とに服せ
閲歴　明治四年藩の史生に任し第七大区第六小区長
管となる（第七大区の六小区も見老津村より橋杭村
に至る二十ヶ村たり）夙夜治を謀り衆愈之に服せ来
たるならす辞罷し後官に就かす
明治十二年県会議員に選はれ常に正論を持し県治に
賛し能く其職を全ふす十三年郷紳を説きて資を醵し
私学を興す熊野学舎と称す名師を聘して経史窮理等
数学を授く遠近風を望み来り学ふ者門戸に盈ち一時
頗る盛なり
明治十七年進みて学舎の拡張を計り其七月串本地方
に遊説し会其資を募り奔走甚努めたりしも事志と
違ひ帰途里野浦に於て遺恨海に投して死す時に齢三
十七同く皆痛惜せさるはなし爾来書生離散し学舎亦
随ひて廃す時人大に之を惜み咨嗟浩歎せさるものな
し（昭和八年十一月廿五日中根七郎謹写）

原見清兵衛君

明治四十年の頃市東二千歩郡下太田村を過ぎ往年原見清兵衛君あり力を農業の改良に畫し大に灌漑の便を開き十年毎に旱害に悩むるを救ひ功績著しきものの有り此為村民藉甚したるを関き一日自治体視察の旁同村の墓道を訪れたるに眺望の間に一基の石碑を認め瞥見を緩ひ近き見れば即君の墓碑なり且驚き且喜び慰に拜跪して冥福を祈りたること有り碑は二重の墓石上に建て徳望紀功碑建設後二三十年のものと見受けたり

歩を轉じて後場に至り君のことを尋ねたるに村長より三枚許美濃紙に書きたる小記録を示されたり之を読めば曾て君の手になれる文章にて毎秋年見の落葉を下後

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号 03964

多数を伴ひ来り少しの斟酌もなく樒柄を弄して埒外に
ナシ貴族の取立多からんことを願ひ農家を成すべくこと
を貴ぶせんことを冀ひて畏伏拜跪懇願を望む有様を五
七句詩の面白き形容を書きたるもの古唐の柳宗元捕蛇
者説を書きて苛政猛於虎也と断じ苛斂誅求の惨毒を述
べたりしと憐び共乗の好参考資料なりと之を写取り
郡役所の記録係に保管きたすも今恐くも其所在明かな
らざるべし

昭和十三年下太田村大泰寺の住職が依頼して碑文の写
送を求めたるまたの紙片を寄せられたり

信濃新聞　遠藤奉公
木利建功　沢末無軒

原見清兵衛翁

百卅七年　安政丙辰
明治二十八年乙未初秋

左右の文字は両側面に彫刻したる文なるべしと左方の安
政丙辰とあるは寛政丙辰とありしを伝聞したるなるべく又明治二十八年云云は建碑の時なるべし
其銘文簡単なれども翁の功績と人となりを察するに足
る即下太田村田圃の潅漑も翁の功績なり永久不滅の
恵沢なり
明治四十年の頃村民さへ恵沢を知らざるものありた
りしかや後代をや又況んや他村の者をや

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03964

大野辰平翁

明治三十年より四十年の頃東彦根郡三十町村に於て篤農家と称せられた下大田村の大野辰平翁を挙げさるを得ず翁は能く私を捨て公に奉し移々農家の福利を進め義多く改良発達を遂げたり此故に當時一帰農郷を懐き迎村基礎を作く

第一度翁は指導者説を聞かんと願ひたるも公事用を除すの操舎なかりし中に翁は市に出を辞し郷土に帰りて其説を聞くを得さるの及ならすも遂業を指すを得さるに至りたり

以来年を閲すること三十有餘年今茲年七十四翁の翁の貌を追ふんと寸祇して後の研究の志を得つゝ（昭和十九

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03964

年四月三日神武天皇祭の翌日京都上京察路の寓居にて中
（招魂日誌）

古墳文化の概況

産業の発達し経済の進歩する所其背後に先覚博雅の士の風教を補ひ文化を助くる者なかるべからず古墳の地往古之を知らず藩政の頃に至り田辺新宮三十里の間に在りて約三百年の久しきに亘り文化の中心地として関へたるもの地理の便を占め漢貿の利を有するに因る可しと雖とも柳亦先覚の士其間に在りて格物致知の義を説き倩身斉家の道を教へ人をして其操守する所を知らしめたるの力與りて少からざるを知らざる可からず今其跡を文籍に徴し故老の言に質し之を琴箭遺墨に考ふるに享和宝暦の間に僧鉄関あり正法寺に住持して学徳一郷に高く明和以降に武内養浩あり古賢博学を以て

地方ハ雄視し著述頗る多し其子其孫皆ハ父祖の遺業を
継ぐ西畑亮明も又養浩ハ学問ハ才藻擅恣たり文化文政
の間名聲遐通す間ハ悔を垂れて子弟を教へ晩年矢明し
て方を醫業に専ら十次子素行亦醫を業として萬行あり
亮明に亜て上野三齋及伊仙あり共に醫を業とし技精く
学優なり而して伊仙は幸先して蘭法を修い又書を能く
す嘉永安政の後なり三齋伊仙の後僧質堂あり僧萬慶ハ
学殖德操人之を仰き吉田正一あり才能明敏衆之ハ服す
同時ハ神保江村津田華山あり文学を好み筒墨を楽み風
流雅淡を以て地方に推重せらる共に藩末多事の頃より
明治景平の時に及ぶ其他齋藤慶則寺松一学島宇之右衛
門等あり其師承する所を明にせざるも一時有為の材を

以て稱せらる憶ふに往年の盛に及ばざるも亦多士濟々
の感なくんばあらず近年嚮学の風隆にして教育月に進
み全運年に新なり此時に方り隱れたるを拾ひ遺響を後世に傳へんとして文化の由来する所を
知らしむるの徒無ならざるを思ひ不敏を顧みずして敢
て図見する所を收録す其既偏誤謬の存するものも之を
識者の補正に俟つと云爾

○僧鉄周

鉄周は中清正法寺の第三世たり過去帳ハ妙心第一座瑞
光中興開山鉄周玄旨和尚宝暦五年八月五日寂七十六本
州出雲生緑駒法蘭舟和尚とあり正法寺中興の人にして
寺運を衰運の際に挽回し法燈を晴澄の時に輝しなるを

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03964

る可し熊野巡覽記に鉄岡の詩を抄し古座八勝を咏する
なり詩も甚一二を擧くれば

古座晴嵐

小市斜聳江清晴、嵐来古座興猶新、南山疊翠晴偏好、
艇舶參差競入湊

住吉秋月

巡出岩怪叢寿社丘、河中光景冒秋、金波萬頃月晴夜
一曲棹家發釣舟

以て其学識の一斑を覗ふ可し彭曰師も固陋具足の人な
りと

○玉川玄龍三世

玉川氏の墓中陰古東谷の北邸に在り古碑あり武内養浩
之墓と勒す碑陰に碑銘あり長子玄龍の撰ふ所なり曰
世武内初名玄龍、晩改養浩、字惇蘭、号霞塘、泉濱人、文臣府
福之裔也、自幼好學師夏島志氏、壯徙家於熊野、潛心馬龍
之學、草思獲禱之經、著本朝通鑑綱目二百餘卷、明史斷建
碧文随筆、寛政之初、南京賈船漂泊于我州、命掌筆譯、著清
客筆話錄、後賜月俸、文化癸酉五月十一日卒、年七十
銘曰　碑縱遺闕　教被峰巒　幽明不外　厥志以成
長男玄龍誌

養浩の碑の下に墓を隔て、玉川玄龍之墓あり是養浩の
長男なり〳〵和歌山藩菊池元習寛政八年五月熊野に遊
ぶ三山紀略の著あり記中に曰く
六日傳兩發、將至養地、適玉川生來投刺、甚文瀾斎先生

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03964

隠子鑒、好書博渉、著日本通鑑二百餘卷、手書一部献
我公、今年七十老益健云、興夫在門、不遑緩語、匆々謝去、
元習古登浦ニ一泊ス、雨を衝て粉々発せんとす、時小瑶
能其旅舎を訪ひ、会辛の際緩語を遑らすして別る遺憾
想ふ可し
長男玄就の碑の下に又玉川玄就墓あり、背に刻して曰春
秋祭祀以時思之、慶應三年十月十一日と見れ、養法の孫玄
就なるべし（名貞蔵と云）寛延元年三月、斉藤拙堂紀南の勝を探
て其著南游志中に
主人命、泛両船於島前、與醫師玉川就蔵導、余俱乗其一云
云
とありて其雅游を興ずしたりと見る

養法著す所熊野巡覧記、四巻、本朝通鑑綱目二百餘卷、明史
斷、連塵文随、清客筆誌録等各若干卷、而して今存するもの
僅に熊野巡覧記の又（昭和十五年五月養法著紀行熊野を略を除写して新に蔵を誠を増
す）しきのみ熊野巡覧記は東行務山田を発し西田辺に至
る紀道の地誌にして亦有用の著なり、而して又其遺墨の
存するものに僅に古座の青原寺に方瓦櫻陣宗系譜一巻
西向の小山氏に家系一巻あり、而して中陽の玉川就太郎
に大島山水記一帖を蔵するのみ、其書端正温雅一字を苟
くせず、尚お貴ぶべきものあり、子玄就著述あるを聞
かざれども、典に父祖の遺風を継き地方に重きを為した
りと云

○西畑喜明

古座青原寺坂ノ辺碑ニ座ありしを西畑亮明之墓とあり
一ト西畑素行墓と云り亮明墓誌銘あり刻せすして其族
姓氏ノ識ナキ人大原晋齋ノ撰なり誌以て其人と為りを
知るに足る曰く

西畑亮明墓誌銘

西畑字三字亮明号鄂牛其先泉州堺人家世商賈及祖
諱義宣住南紀年漏郡古座浦遂為南紀人父諱某勤倹克
家父某及亮明二世並為里正以其勤勞国主命為郷士亮
明少好文籍師事郷人武内玄蘇天性強識凡百事物一觸
耳目終身不遺以故諸藝雜技不学自能通大體尤
善書兼精筮事中年不幸家零落又罹眼疾人皆傷其不
幸亮明處之晏如文墨自樂及齢五十餘眼疾日篤自知其
不愈乃專心於刀圭精神之所徹亦自妙其術郷曲素信亮
明之為人病者競湊其門失明之後十年間固得以数口不
飢家亦漸徳旧云天保七年丙申春三月二十九日病歿
于家享年六十有四葬于古座青原寺先塋之次有三男八
女長子平五承其業亮明與人有恩其死郷人挙惜云古座
地僻俗鄙自昔其従事文墨僅獨有武内惟灝二二之歿幸
亮明継其餘風而今亦歿矣予之遊南紀徘徊古座者前後
凡三典亮明親善其初游亮明已盲矣然猶能摸索書方寸
字其再遊遂不能復書字雙手撫予眉呼予名而話曰我於
世事眼既瞑矣百年之後幸焚子之一筆題吾墓則足矣余
許諾之丁酉之冬重遊古座亮明既死矣及其屬壙中遺言
于姪以墓誌託予云予固其不肖謬然不知演之所從遂為之

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03964

誌旦系銘曰

伍長鍛冶隊猿鳥　私娛文於冥冥　嗚乎亮明　能
野之芳　　平安　大原錫蕭撰

亮明の孫中清の斎藤氏に嫁する者年九十幼時亮明の平生を因て問ふ能之を記す、昭和四年八月其逸事を認めて曰
亮明家廻船問屋を営み奥高を兼ね庄屋の傍鯨方頭取を
命せらる常て古座と椿野との間漁場の帝生一難難抗論
甚だめたりと雖とも遂に敗訴となり閭村憂愁策の極す
可き方一適亮明家に在らず帰りて之を聞き敢然自其衝
に當り之を周参見の代官所に訴へ代官に謁して其の事
由を陳して古座の便権を伸ばし一向を懐中せしむ
之を甚だ曰白雲の表の二葉のうつくしさと代官受け
徴吟信誦し筆を記りて向をくゞる之をきゝ名かなと嘆
ふ依て古座の古座を容れ椿野と隔日交代を以て出漁せ
しむ郷党初めて愁眉を開き永く亮明の功を頌し其像を
仰くと云又曰古座善照寺の方丈其裏方夏目氏と遠言せ
りて和せず相結らさること三年檀徒等周旋力むと雖と
も堅く持して解けず因て亮明を常て亮明一日国歌を懐
し東方を訪ひて之を示す東方一読して秋然自愛めて
徒曰のみくたりしと云
亮明の句集数遠して存するもの古座の板金玉
井佐兵衛十望楼の記を蔵し遺墨幅の数詩の及ぶ所
たり記す曰く

十望楼の記

笑が流れ除むると一の楼あり常が坊客をとゝむ市廛
生涯十年春の頃この楼が登りて、静心すれ春の色を愛
す、主人一樽を携来、手と盃を傾け、酒酣かたり、おつゝ祝
とり出しこの楼の記を乞ひ、求、されと我素より
栽文表がおそれためすの才とおもへくとすいへとも、せち
こ辺すさゝれす、稲舟のいなむかたくて、つたなき筆を
とり、もるかが天地の間をあかれを、東す湖たる滄海
が、極野時雲す如くまい横たへ、其本より男美を志ら
の峰々たちのはれを、左右より続ふ舟、鳥の飛かひとし
ちゝいさんかたき、星島を蝸牛の角ふりわたす計なき
りけれす釣をゝ小舟が仲艤をを圭安一大島の港が
ゆゝ妻帆片帆夕を朝をみ涼しく見へ、駿が岩屋ないし

くたちゝらんと詠し給ふ酒の岬を南ゝの入ふ一酒の宮
都草いく重の春や繁ふらん橋杭を斜かけわたして雪
る中が一と日出をし、いみ一き地の酒の真砂を照る日
を映して玉をたくかそと疑され、合志の酒の網引き
声折を仮寝の夢をたん破つゝ、また西が陸を巡ゝ
し室海聖の跡を垂給ふかさる山を、峯の深く籠外山の
花を踏かこそくりて、突ふらんとだて繁名みゝ松ふ
月の漕を北が流れを遠かからなを、かをもはせて新人を
古一ゝ、筑を古座川の流沿ことして畫図をすを、ら
ち日さす都が伊木杯運ふ舟の業をけく、川辺室人名の
夜を、小夜篠の聲耳かさゝ、やきて客のこゝろを動すを
らん、笑一驚が十景を見書をり仏れを十望楼と呼を

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03964

へたるへしと書つらねたれと古御山の人相らしいよりこんと同しく筆をとゝ絶ぬ
この寺むかしやとなら向てもかゝるいい
文化十餘五廻年歳寅陬生望むか
　　無逸軒
　　野牛拙

○西畑素行

素行は寛明の子平五の弟たり醫業を継承して研鑽詩賦父の名声を墜さず自持すること謹厳の人を待つこと寛裕たり貧窮の者あらは施藥授藥して其價を取らず曰ふ地方の事は於て多く盡す能はず聊以て自償ふと萬行を以て同力

○上野三齋と伊仙

上野三齋及上野伊仙共に醫を業とし学識技能倚輩に超由遠近治を乞ふ者夥しく三齋は古堂に住居す仁者の風あり業間暇を開きて子弟を薫陶す伊仙は春庭と云字先し蘭法を修め名声特に著はる性寡欲清慎能く詩筆に述し又書を能くし解墨法蘭人之を愛重す始大坂に居て洋学を開業し後薩に移る三齋伊仙と類類たり嘉永より明治初に及ぶ共に見識高尚にして道化を以て世に表するのみ云ふ同く伊仙の父義篤國歌を善くし其名高し

○神保江村

神保江村名は市右衛門中陵の人なり家世醤油醸造を

業と十文字を好み業餘風雅を樂び維新の後舊學を廢せらるゝや自費を投じて和歌山の人野呂饒藏を聘し繙學所を開きて子弟を教育す明治四年より後古座小學校の創立せられたるとき之を廢ナ次し學務事業となり學事を精勵し敢怠する所少からず十二年戸長を命ぜられ一月一日を辭し依然學事に盡し十六年老を以て罷む後病を発す大正十二年小學校創立五十年の式典に方り往年の功績を追想して古座所より之を表彰せらる江村南臣を山下蕙雨と共に最も花鳥を能くす交友知名の士多

○津田清右衛門

津田清右衛門華山と號す又花陽醉士の號あり古座藩の

文學を好み詩を作り人と為り明敏辯才あり文學を好み詩を作り人と為り明敏辯才あり

常に公卿墨の士を迎き交を結ぶ知名の人多し兩角古香、

名橋雪美、村田春谷、山下蕙雨及墨仙綠村屋隆等枕を古座

に敲く者甚多かりき華山書を能くし雅健

にして俗流を拔く又時に臣筆を揮ふ詩あり

戊子春興

月訪梅花為好主、梅迎月影為佳賓　佳賓好主更清絶

誉領黄昏一刺春

明治二十二年元旦口號　元日やかのふの泉す

曉鴉啼處東天紅　雙松早已弄春風　家に寄こ新年宴

玄年鬼列賀賓中

大題

美人因美若　才子為才窮　請見花照艶　用風亦落風

又

交光輝食足花平　青風影裏等生涯　一花一宿乾坤閑

家二芳園皆我家

華山明治五年産屋となり後嘉永六年家督となり次で副
子長となる明治二十二年死去長子清右衛門家を継き次
子豊次郎出て、藤田氏を副く豊次郎亦詩歌を善くすと
云

○僧賢堂及満慶

賢堂は中陸正法寺第八世たり学識広く徳行高く性恬淡物
に執着せず星岡帰依する者多く其名緇流に著はる東年
甚郎田原村に生れ明治廿年第十賢堂の指教を受けたる
者蓋少からさるへし然れとも教員本林文珂の外其名を
逸す

満慶は古座の人なり仏典に通し儒学を修む常に人を教
へて華ことして倦ます山本阜耳湯川良太郎等其門
に出て、有為の材と為る満慶強徳方く保堂記を作る明
治三年仏化す青原寺第十四世たり雖世に曰く
世の中に思ふくの切迫居一まく清十年に力くなり

○吉田正一

吉田正一は中陸の人なり學識材幹あり維新の際吉田貢
吉田三郎右正門と其名を著くし人三吉田と稱し之を最
敬す明治七年第七大区七小区の副戸長となり古座川四
十三ヶ村の村治を主管す明治十二年新設所を置かるゝ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03964

や新書記に抜擢せられ在職数月にして罷めて帰り専ら心を教育事業に用ゐる貢献する所少からず云明治十九年歿す

○齋藤慶則

齋藤慶則は古座の人なり雄才慧敏新進頭角を見はせり人望を属し自ら期する所あり有田郡の産にして古座に門を開き若山の人岩橋の知遇を受け大坂に赴き豪商鴻池善右エ門の店に入り擢せられて総番頭となり手腕を商界に振ひ駿足を北海道の間に拓き伴に事志と違ふ所あり後転して復業に死し明治三十三年歿す時人之を惜むと云

○寺松一學島宇之右衛門

寺松一學島宇之右衛門は學を好み先輩を以て推さる明治六年古座小学校の開かるゝ之が教員に擬せらるゝ者頻に振ふ当時の時運如何を言ふに今の古座市地明神か川西向文墨の所材に亘り程度に殆と中学に類したりと云寺松一学は寺僧に住し明治九年十月第十大区十小区誌の副戸長に任せられ在職一年にして退き島宇之右衛門は明治九年十二月古座浦治代に挙げられ新習慣制法実施の際に及び罷めて新塾を開き以て人と為りの大概を知るべきなり

○岩時傳兵衛　吉井傳右衛門

岩時傳兵衛は其先佐原十郎左エ門尉義連より出つと云家廻船問屋を業とし門戸繁栄して資産家を以て聞ゆ傳兵衛文雅に親み筆椅を善くす明治四年所長となり六年

副戸長に挙げられ七年之を辞す玉井善右衛門と代々塾
会を業とし家名遠く聞ゆ善右衛門書を読み詩見あり郷
閭事ある毎先ずして斡旋に努む又夢て演場宴会の奮か
當り功労多かりき故の人々皆方に推重せら
る善右衛門の祖父作兵衛国秋を善くし好古と歩を吟味
詠すべきの美しと云遺墨の家に傳ふるもの僅か一日
く

黒木の関に題す

おら偉なくまたきき月かゆめたせまくこ一夫かと涙
の出らこ

○高師市助

高師市助古学に信ひ木工棟梁なり詩書を好み常に学ひ
て手に書冊を懐ふ年と共に進境あり往に業者を
驚かす又俳句を巧に其名著まる郡の指導を請ふ者少
からず云界村制実施の際助役に挙げられ在職二年若
を以て辞す

（古学文化の概説は）昭和四年古学を去られたり
とき 古学失張 初期に於ける五人に須つ）

「書き

今様刑部左衛門一ッたゝら後日の物語りつき、友人矢田德太郎
翁の忠告せられたる書東の一部分
（前略）右作一ッたゝら後日物語再四拜讀仕候、本時墓官吏
ありて横領を逞ふ〳〵民を害ひ帰村の共有地を没収せるみを
る有志のもの奮起して之と抗争せしが遂に之を獄屋に投入せり
こゝに一人年使の士ありて出て之を救ひたりといふ事實を物語り
話して敷演せしめあらんか其行文流暢雄壮首節七五調を送
行文と面白く拜誦敬服の至りに堪へず幸偶言之（下略）
三月一日（昭和十年）　矢田德太郎

中根崇先輩右

矢田翁も偉行家なり國漢文の中等教員を教育界に重

んぜられたる仁たり

又友人中村師竹翁より、

拝啟昨日は突然参上御清閑を妨げ失礼仕候乍拝借の一ッたこら、いと面白く拝見いたし候行文流暢一読富時を偶け詩の感ありき前海こと

中村師竹

二月六日

題蕉賢墨蹟　定石

中村翁も詩人を以て一流の書家たり又と本書を教員となり後中等教員となりたり

記中の人名は皆実名を用ひたり御世話の節先生たるの外も大方は事実なり（昭和十五年四月十日追記中根七郎）

今様刑部左衛門一ッたゝら後日の物語

昔は兵庫の縣なる稲原の邊りは信夫、昔の昔は藤井の郷領をなしたりと云へる何某の末孫か、中村の親戚となむ呼へる漢なりけるに、一ト年熊野なる那智の滝山の霊場を拝まんやとて、旅の装ひこくなく、已か住家なる山口田井の金沢か難波津や茅渟の海辺の和泉路を、跡ゝ山口田井の関ゝ越えて吹上の白菊か、田鶴鳴きわたる和歌の浦、紀三井の寺を伏し拝み、汐の干潟を歩みわき、里江の里山藤白の、嶮しき嶺をおち越えて、湯浅坊と徳鞍津の、昔の址を尋ねつゝ、安居の山辺の十九折、過ぎて心ゝ周参見浦、二色を着たる手弱女の、さゝ寄来やゝ大島田、杉ゝやさゝき姫の俤、去りのめりおかぬ去登川と、玉の浦へ出て来から、離れか

島かなく千鳥、鶯りゝ啼きさゝ波の、寄する浦の宮を経て、
那智の瀑山と書き出されたる、所も殊に
櫻木の、花の嵐か散る風情、いと面白く見えわけり、
斯くて旅の衣の塵ゝ地に、如意輪観世音のなかつきて、
恭しく尊像を仰き奉るに、真如の月光を濁世の無明を照
らし、法相の妙音を暗塵の煩悩を散し、法華の仏慧ふる
か物なく、随喜の涙止むるか由なし、書しか禮と、弥堂の片
隅か座をしめ、弥陀の聖歌を唱へつゝ、攀登の草鞋を脱たり
しか、旅路の疲労と参詣の安神とを、何時しか福寿の海
と陽の華背の国か遥へ心地したる所しも、不思議山観
世音菩薩急焉として現前か出現まし〳〵て宣ふ様は、義経
ここ迄方の信心よ喜ひ、安く可き事の有りつゝを、

其の昔この那智山の谷興れ、一ツ鶴と呼ふ怪しき化生現れ
れ、方能まして強く、喜び自在まして、神通の能有り、已に頑を
肆まして、旅客を撹め悩まし、里人を脅かし、禁ふ、其の言葉
語ふ絶を、用くに年の年も怖を恐れ、里人を怖ち恐
れて生業まして出かれ、旅人を敵き懐ひを足跡を絶つ中を
りしかも、那智山の人を色川の里人達、三を委ね哀みを、何年
して其の害を除かまやと、旅孫を重ねたるまに、世を匹ね
なき面者を頼みて、之を退治する外を有ますと、憂ひか
言れを立て僧侶を難けて和めたるに、其の頃平家の落
人とかして、有場の兵部左エ門とちんいへる武士有り、
り出ていを自ら之を退治せむと願へたるに、何れも喜
ひて其人を、之を頼みけさ、兵部左エ門といふ者は

[illegible]士となりければ、深山よりおけ又く、法術を盡して逆を救
の化生の者を訪ね取り、日比の山を除きしかば、瑞山の家
を言ふに更なり、色川の屋敷たちも再生の思ひをなすに事
ひけり、
扨て其の報賞として廣き山林を所部左工門に進めしか、
左衛の軍賞を望みたりければ、之を屋敷たちの入會の山と
なして其の生業の助けとなすべき、時頼の所れ、此の邊
りに隠れ在す、平家の公達を頼むなりと、山林を受けさ
りければ、伊勢の国を任せて、此の山を山人屋敷たち
が本の業を捨てて樵となす、枝木を折りて薪炭の料とな
し、子に孫にと伝へて後の世に至る、是を色川氏十八箇村
入會山の起原なる

話定りて、平家は熊野に言く積みたる功徳と、清盛が専横
の罪障深ければ、神に左遷を傳め給ひ、佛に冥助を垂れ給
さず、さて清盛を極めたる其の一門を厚島檀の浦の戦
ひに、接戦を繁けて海原の藻屑となす、世上の水泡と消え
失せたること傳へ聞けれ、平家は敗なくて、源家幕
府の世となり、政の權は初めて鎌倉に移り、次て北條となな
り、足利となり、織田豊臣の世となる、織川の流れの末となる
まで四百年を經ることなれば、主政の古が續し
て、光輝ある明治の御代となる、
世は神武の昔に復り、民は大平の夢となり賞め、百敵の制度
文物は崇けて泰西の長を採り、瑞田の經を補ひて、日進月
歩の勢はさまざまりければ、彼の十八箇村入會の山林は

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03964

上地の林となり、家方が取り上げられ、及ずき因縁り家が
絶えぬ、山人星人の生業り嘆かわしき事缺かず、哀れ猟人達
の為かこれを苦かし返す術しかなく、勢かせ給ふと見えれば
も、其の年浅き稚き頃を、青の短夜明け易く、暗黒なる島
の言が、おち驚きて目を覚ます
時が冬日の蔵人の、孫が京の都、小川荘司の末山本の兄弟、
高砂別当の後達藤め清三郎色川目代の商水口の第四郎
等、分れし同一夢がまとろみたりしが、奇異の示現か夢覚
めて、互が顔を見合せつ、語れば共に皆同じ観音菩薩の義
態の若嗟歎せなしは無かりけり、されば此の五人の人達
も、互が力を戮せ心を一つにして、其の山の下麓を、公の後
所が只管が願せたれとて、其の記録や如何が、其の諸様

や如何とて、容易が許さるべくもなかりけれども、餘儀な
く刻直の宿が願せたりけれども、観世音の霊験ならねば、
仏陀の冥助著しかりけれども、遂が勝訴とならず、在り合が
立ち返りぬ、佛山の人々は中々及ばず、色川十八釜村の
人々の喜驚を方なし、
斯くて五人の衆も、那谷の佛山が馳せ登り、御宝前が伏し
伏して、観世音の霊利益を奉願、猶も佛加護を祈りつ、
山の麓林を還り来て方を物語り、互が交す其の
祈りが、遥の向ふの山の上が、百雷一時が裂けて、劇しき音
と驚きて、一と筋方を眺むれば、白き煙の立ち昇り、跡と
黒雲が、まを掩ひ、疾風の如く襲ひ来て、忽ち此辺が真の暗
闇となり、五人の衆を引潜へ、行衛とも無く消

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03964

それ行く、跡を明らき夕陽影かくして不思議の出来事か、驚き叫ぶ諸聲を、同きて疑ひ来る常山と、唯呆然たる許りなり

是くて、さき五人の衆より、曾て刻直の宮ヶ原出したる、大昔古帳なる古文書なり、古の貴重なる記録なるが、彼の化生の者と、三を出の節の信造なりとして、深き疑を五人の衆かかけ、其の神通力を以て、或る時は新宮か現れ、或る時は古墓か現を見せ、下屋か那谷か、神出鬼没して、例り難きものなり、其の上か五人の衆を別々か羅致して訊問すかか、雷雲嘲辱を以て、甚しきは打擲して、苦々搭問か苦しめ、折檻を加へ、たりとりて苦しめたりとて五人の衆の法を信じて物語る所なり、當時彼の事は非常な世間を驚かして、人々は彼の化生の者を皆の一々たちらの再来なりと互に噂し合ひけりとそ

彼の事なりしより五人の衆の妻子等の嘆きは言ふに更なり、地方の人達は眼き悲しみ、如何ばかりか、彼の人達を易けまやと、千二か心をおちなき、拔殊懈りまかりしか、家か色川の里か父保の嘉七となん呼くる豪の者なりける、其の名古たりか響き渡れり、皆原の流れを汲みて、数の道かいそしみたる者なり、後ては財勢を幸なる功を皆けて、又縣海の海上として威力を奮ひし事隠れなき武夫なりしか、法然として逝去上り、東に寄り西か立り、峻山か登り急流を渡り、千辛万苦を重ねて教授か身を安んたりしか、一夕仏の御告けなりて、古き頃か拾り置きたる、大昔古帳

の高しを逆出し、逆を前きかつ司直の官が差出したる古文書と對照するに、少し差違所なかりければ、前きの古文書は此の旨の偽造と断ずるまで明白錯が掛くるかなし、是なん当刑訴左に可が強より授けたる証拠が強勝る武器なれば、見さへ、吉れば仕生の者を取り捕らが仔細なしと、書立書を出立ちまりしかば、仕生の者は張ての仕みの外れたれば、怨りの形相凄まく、こいこしやくたる仕業哉と、常ひたる勘を四方が振りかざし、勢猛く防きたりしかば、さすがの嘉七も攻めあぐみ、一時者く見えたりしも、翁青蓋の実助の預かりけむ、仕生の者を離き去り伏せ、五人の累を仕生の住家より助け出しけり、五人の家は身ありつる寄を書き、樫禁の苦みを免かれて、年生の思ひを

たり、世の人こもれを喜びて、何れも其の武勇の程を賞讃し、後の刑部左衛門たりと称へけり（昭和十年一月二十日古座町中信の寄居より中根七郎氏筆）

全者が同きをる書かなる

治時刑体者

古座家系図七田村磐部補

馬場樣事　此人は事件の直接を迂せられたりと云、樣

事柄は遠く保元を経め暁に至る数世を歌撃最近者

殊勝勝とたりたり、水は三打撲を受け辛倒したり、試

同は冨豪明厚の言を用ひ強盗を捕縛を垂れ

たり又証言を用ひ自白を強要したりと云山方は

を逆に古代にも弾圧があったりと云、長川の法水
異六に記くとしても頑くられ仏教として監禁を受け
たり法燈知覚したり久保を一時拘禁せらる
該寄附事を兵藤理吉大隠等のくたりと法異を挙げ
て無罪たり既和十年一月帝国議会に於て人権蹂躙問
題より貴族院議員を委員部に於て問演会を開き仏教に於
て非常なる宣時法に対し、了事方たりと見る
聖代の不祥事と言へし

昭和九年四月七日完

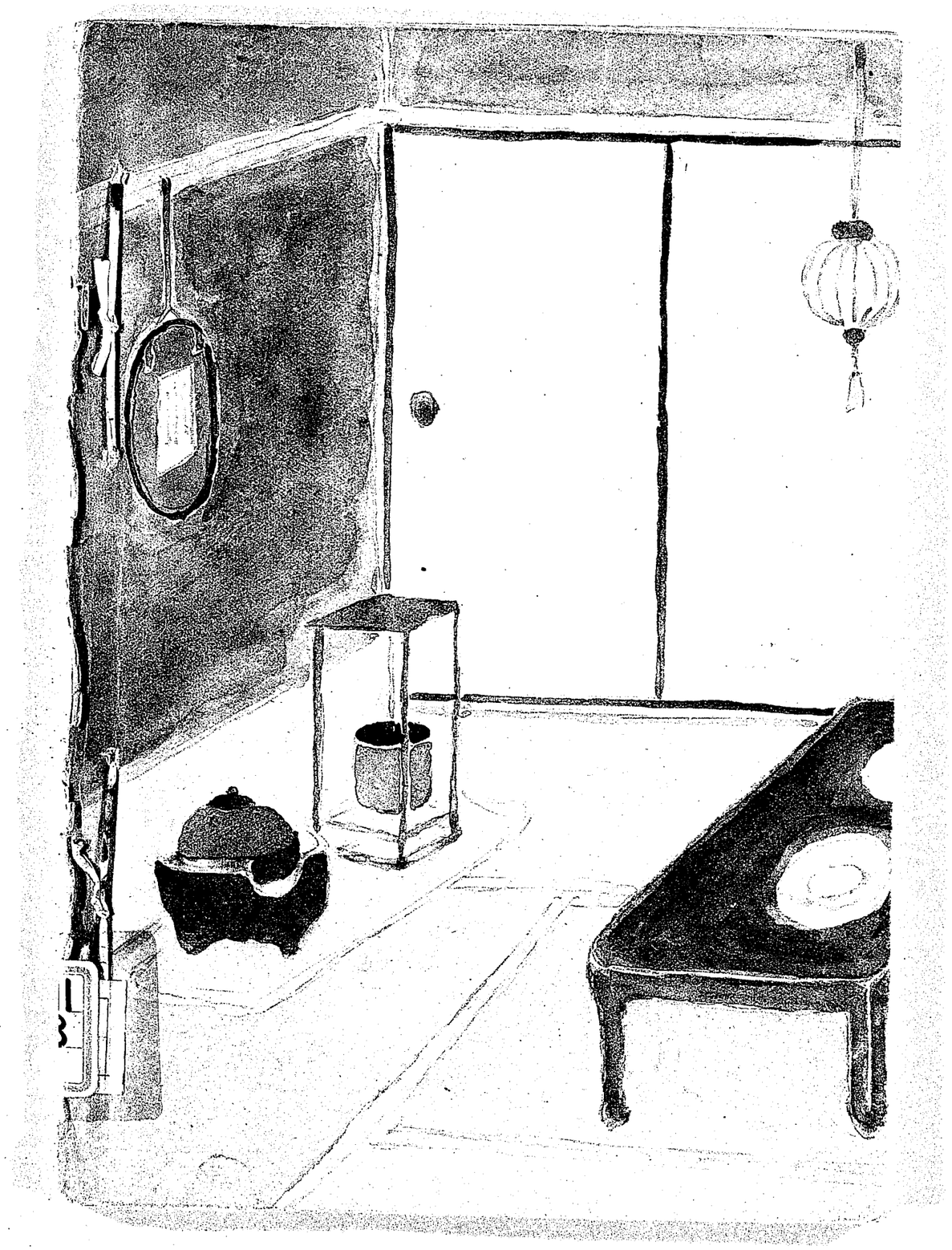
祥原寺祖蓮老師

高地町祥原寺の先住を祖蓮和尚と云、屋張の人なり俗姓
を宮内と稱す當時古座の青原寺満慶中僧正法寺の賢堂
と共に高徳を以て並稱せられ如方人士の信仰厚かりし
といふ
江田陣の名士陣春暉氏く和尚に帰依して其堂に参禪を
たり一日和尚を古座に請せんとす師之を慫せず、て、に
於て春暉江田より駕に乗して来り古田より特に徒歩し
て祥原寺に帰りたりと云
春暉死し當に葬らんとす適まに方和の豪商付藤氏に不幸
あり付藤氏の人必其付藤氏の葬に會せんことを期したりしに師之を有みず江田陣に赴

く時々其苦衆を屈せさるを嘆賞したりと云
師年老て動作便ならす本山も時々優遇したる女性を侍せ
しむることを許したりと云
一以上は方丈の松原志翁の話なり（昭和十年二月せ）
宗教家の黄白の賂に富豪を媚おもねる者四方に少からす斯る
時に師の如き有り宗教界の為に大に喜ぶべし

昭和十九年四月八日補

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03964



県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 03964